

書評

小谷野純一訳・注『紫式部日記』(原文&現代語訳シリーズ)

新井英之

古典の文学作品を読んでいると、分からない言葉に出会ふことがしばしばある。いや、古典とはかぎらないか。明治・大正期の作品を読む時にもそんなことがあって、そういう場合ぼくらは「注釈」を頼りにする。この言葉なんだろう、とおもって頭注なり脚注なりを見渡して、なるほど、と疑問を解決してもらふことはしばしばだ。

しかし、この水先案内人はおのおのだいぶ差があるような気がする。それに、注釈は必ずしも読者の求めに応じているとはかぎらない。研究者本人に抱える謎があって、その謎を解いたのが注釈だから。例外も時にはあるかもしれないが、しかし、読者の疑問に直接こたえたる類のものではない。だから、読者が疑問に思った言葉や表現に説明がついていなくて残念なおもいをする、そんな場合もときたまある。

これはなにも注釈をほどこす研究者のせいばかりとはいえない。本書、原文&現代語訳シリーズのような場合、注釈に

あてる紙幅はかぎられたものになるのではないか。そうなれば、解説をほどこす言葉や表現は、おのずから厳選されることになる。この取捨選択の匙加減はかなり難しいだろう。第一に研究者が自分自身の謎に感じようとする欲求がある。そして、作品がスムーズに読めるようにとの読者への配慮がある。このバランスを欠いて前者に傾くと「注」は、研究者のモノローグめいてしまう。

しかし、本書、笠間文庫原文&現代語訳シリーズの小谷野純一訳注『紫式部日記』は、そのバランスが絶妙である。この本によってぼくらは、紫式部日記そのものの興趣を味わうのはもちろん、注釈者小谷野先生の関心がいずれに向いているか、あるいはそれぞれの注釈がどこに向かって投げかけられているか、楽しみながら読めるのだから。

具体的な話でいこう。たとえば、一五二ページ・第五一節「和泉式部といふ人こそ」。書簡体部分の、三人の女流歌人を

批評したくでありである。和泉式部を評するこの一節は、これまで「口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし」と読まれてきた。本書はそれを、「口にと、歌のよまるるなめり」とぞ見えたるすぢにはべるかし」とあらためる。そして脚注九（これは一五三ページ）には、「と、歌の『と』の本文箇所は『疾し』の語幹で副詞用法、すばやく、咄嗟などの意になる。」と解く。

和泉式部の歌の即興性については、紫式部自身、この前に「口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、」と認め、指摘するところ。また、和泉式部の家集に見出す逸話、たとえば、藤原道長に「うかれ女の扇」と落書きされたり、「尼になりなむといひしはいかが」なんてからかわれた折に、さらりと悪態の歌を詠んでのける彼女の器量をおもいだせば、脚注九は、歌人の特性を見極めた鋭い新見、ときれいに納得がいく。

また、こんな注も目を引く。一七三ページ・第五七節「御文に」。同じく書簡体部分、その末尾である。目を向けてほしいのは、一七四ページ・第一行「この春しはべりしち」。脚注三、こんなふうの説かれている。「『この春』は、この手紙を書いている現時点の春。書簡自体が虚構であるから、いつの春であるかなどという詮索は無意味である。」と。注の末尾は、きつといずれかの先行研究に投げかけられた言葉にちがいない、興味をひくだろう。

しかしここで読者は当惑するか。なぜなら、日記の日付が現代の何月頃に相当するか、ともすると忘れがちなこの点を、冒頭からじつに丁寧に教えられているはずだから。「秋のけはひ入り立つままに」はグレゴリオ暦で九月十八日、「御五十日は、霜月のついたちの日」は同じく十二月七日、「寅の日の朝」は十二月二十七日というぐあいに。しかし、もとまどった場合は、二〇八ページの解説「二 紫式部日記の世界」（書簡体部分については、二一九ページから詳しい）へページを移すといい。同じ注の「書簡体自体が虚構であるから」との指摘も交えて興味深く論じられている。「書き手によって装置された〈語り手〉が、架空の〈読み手〉に對峙し、語り続けているという表現機構になっているのだ」と。この切れ味鋭い解説に、読者は興味をそそられて、ページは一気に巻末をむかえるかもしれない。

ところで、本書の脚注でもっとも長い注は、どんな言葉・表現に付いているか。つまらないこと考えるなあ、と呆れずにちょっと確かめてもらいたい。

一八〇ページ、道長と紫式部との贈答歌である。第五九節の後半「渡殿に寝たる夜」の贈答のうち、道長の贈歌「夜もすがら水鶏よりけになくぞ真木の戸口にたたきわびつる」に對する脚注二。この注はじつに一八〇ページの下段を九割近く占める。注目すべきは、「なお、式部の局を訪れ、この歌を詠じる道長とこれに応える彼女という図柄を、実人生に

引き下ろしては不当。密かに通じる男と女といった構図における掛け合いの戯れ。」とする点。

脚注二は、『尊卑分脈』の「御堂関白道長妾」とする伝、あるいはこれを以て両者の関係を云々する立場への批判となる。同様の視点は、六ページ・第三節「渡殿の戸口の局に見出だせば」の、やはりこの二人の贈答歌。そのうちの紫式部の返歌にすでにほどこされていた。七ページ・脚注六「なお、以上の贈答歌は二人の戯れとなるので、注意したい。」と。要するに「見立て」の遊びである。屈指の物語作者なら、これくらいの趣向はごく当り前なことかもしれない。しかし、ぼくらはそういう表現の仕掛けを見抜かずに、容易に実生活に結びつけ、実録風に捉えがちだ。不慣れな旅人はやはり、水先案内人を頼りにして、この案内人が歩を留め、語る話にじっくり耳をたむけるべきだろう。そのとき、文学作品の、本当の、あるいは新たな地平は開けてくるにちがいない。

「注釈」は、ときにモノローグめいてしまふ、と言っただけだが、本書は逆に対話的だ。紹介した注（あるいはそれ以外にも）は先行研究と向きあう姿勢が鮮明だから、主張がはっきりしている。また、「解説」に散見する「わたしたち」という言葉のおだやかな趣。本書の読者は、この対話的な雰囲気によって、著者のすぐそばで話を聞いている、そんな気持ちになるのではないだろうか。その時、ぼくらはきっと、NHKラジオで流れた小谷野先生のやさしい声を記憶の淵からよ

びさまし、丁寧な解説を懐かしむことになるだろう。そして、時折まじったジョークもおもいだして、くすくすするにちがいない。

（二〇〇七年四月 笠間書院刊 四六判 一三二六頁）